

令和元年6月15日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02176

研究課題名（和文）宗教学の生成とその展開に関する総合的研究

研究課題名（英文）Synthetic research on becoming and development of the Science of religion

研究代表者

江川 純一（EGAWA, Junichi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：40636693

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：イタリア、ドイツ、オーストリアの文書館・図書館での資料収集と研究会の継続により、19世紀中ごろから20世紀初めごろまでの「宗教学黎明期」について、以下の点を明らかにした。第一に、「宗教」より劣ったものとして捉えられていた「呪術」を人間にとって普遍的な現象として肯定的に捉えたのは、カトリック文化圏の宗教学者たちであったこと。次に、初期の宗教学者は、哲学を意識しつつ、それとの差異化を図る形で自らの学問を打ち出したということ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宗教学の生成期を再検討する本研究によって、「宗教」と「呪術」を区分した上で前者を肯定的なものとする思考がプロテスタンティズムに基づくものであり、近代の宗教学や社会人類学が両者の接続性を説いたことが明らかになった。これは「呪術」の普遍性という新たな視点に繋がる。

また、宗教学の流れと哲学の流れを合わせて考察することの意義を打ち出すことができた。

研究成果の概要（英文）：By dint of surveys in archives and libraries in Italy, Germany, and Austria, and of an accumulation of study meetings, we clarified the following points about “the beginning of the science of religion (from the middle of the 19th century to the early 20th century)”. Firstly, it was the Catholic scholars of religious studies who valued the “magic” positively as a universal human phenomenon. Secondly, the early religious scholars were conscious of “philosophy” and launched their own study by clarifying the difference between “Science of religion” and “philosophy”.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教学 学問史 イタリア 宗教史 学 ヴィーコ ベッタッツォーニ フランス 社会学
年報 学派 ドイツ 宗教学 聖概念 神学と宗教学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1970年代以降、「宗教」概念の自明性が揺らぎ始め、その近代性とキリスト教中心主義が強く意識されるようになった(所謂、宗教概念批判)。そして、この流れを受け、宗教学という営為自体の構築性を意識した学問史がヨーロッパ諸語で書かれ始めた。Eric J. Sharpe, *Comparative Religion: A History* (1975)や、本研究の分担者でもある久保田が翻訳者として関わった、ハンス・G・キッペンベルク『宗教史の発見 宗教学と近代』(月本昭男・渡辺学・久保田浩訳、岩波書店、2005年。原著は1997年)さらにはイタリア語の Alessandra Ciattini, *Antropologia delle religioni* (1997)が示したのは、宗教学の学問史的検討によって「近代」を批判的に分析することの有効性、そして、19世紀後半のイギリスの学問状況を研究することの重要性であった。なぜならこの時期に、イギリスを舞台として宗教学(Science of religion)、社会人類学(Social anthropology)、民俗学(Folklore)といった諸学が、相互に影響を及ぼしながら、学問的に確立されたためである。この時期のイギリスを対象とした人類学の先行研究としてはGeorge W. Stocking Jr., *Victorian Anthropology* (1987)とAfter Tylor: *British Social Anthropology 1888-1951* (1995)、Efram Sera-Shriar, *The Making of British Anthropology, 1813-1871* (2013)などが挙げられる。

本研究の代表者は、フランスの『社会学年報』派(デュルケーム学派)のロベール・エルツの聖人崇敬研究を対象として修士論文を書いた。博士課程進学後は、『社会学年報』派と同時代のイタリアに目を向け、イタリア宗教史学の創始者であるラッファエーレ・ペッタッツォーニを扱った博士論文を執筆した。また、宗教学黎明期の著作の翻訳の重要性を認識したため、『社会学年報』派のマルセル・モース『贈与論』の翻訳を行い(共訳。ちくま学芸文庫、2009年)、2013年には編集委員の一人として『宗教学名著選』(国書刊行会)の刊行を開始した。2014年度からは、科学研究費若手研究(B)「イタリア宗教史学派の宗教理解に関する体系的研究」を受給し、2015年に『イタリア宗教史学の誕生 ペッタッツォーニの宗教思想とその歴史的背景』(勁草書房)を刊行した。

これまでの研究の過程において研究代表者が痛感したのは、フランス『社会学年報』派や、イタリア宗教史学派を、19世紀後半のイギリスの宗教研究と合わせて考察しなければならないということである。なぜなら、フランス『社会学年報』派やイタリア宗教史学派には、マックス・ミュラーの「ナチュリズム」、タイラーの「アニミズム」、ラングの「最高存在」、ロバートソン・スミスの「聖」、フレイザーの「トーテミズム」、マレットの「mana」が、不可欠の分析概念として流れ込んでいるからである。

2. 研究の目的

これまで19世紀後半と20世紀前半の有機的接続という問題意識に基づく研究が、十全に行われてきたとは言えない。先に挙げた先行研究をみると、まず、宗教学の学問史研究では、(宗教人類学、宗教史学、宗教心理学、宗教社会学、宗教現象学といった形で)宗教研究全体に目を配ることが優先されているため、19世紀後半イギリスと20世紀前半フランスの宗教研究の連関が掘り下げられていないし、イタリアの状況に至っては、イタリア語の著作以外では、そもそも考察されていない。また、人類学の学問史においては、宗教理論が中心的に扱われているわけではない。そのため、宗教理論の生成と展開を主題として、19世紀後半のイギリス宗教学・社会人類学、20世紀前半のフランス『社会学年報』派、そしてイタリア宗教史学派の連関を総合的に研究する必要がある。

一つの地域の研究にとどまらず、しかも50年間以上を扱うためには、優れた研究者との連携が不可欠であるため、宗教学黎明期におけるヨーロッパの宗教思想と宗教学史を専門とする研究者二名を研究分担者、一名を研究協力者とする。分担者の山崎は、フランス『社会学年報』派の専門家であり、昨年、デュルケームの *Les Formes élémentaires de la vie religieuse* の新訳(『宗教生活の基本形態』ちくま学芸文庫)を刊行した。また、久保田は19・20世紀のドイツ宗教思想とヨーロッパの宗教学史を専門としており、マックス・ミュラーの "Introduction to the Science of Religion" (『宗教学序説』、『比較宗教学の誕生』国書刊行会)の新訳を担当した。さらに、研究協力者の堀は現在、タイラーの *Primitive religion* の翻訳を行っている。三名とも、狭義の地域研究にとどまらない、ヨーロッパ域内で相互に影響を及ぼし合いながら成立してきた宗教学黎明期の歴史を再考しようとする本研究課題にとって不可欠の研究者である。

3. 研究の方法

まず、後世に大きな影響を与えることになる宗教理論を提出したマックス・ミュラー、タイラー、ラング、デュルケームを主たる対象とし、テキストに立ち返ってその宗教理論を再考する。デュルケームは『宗教生活の基本形態』第一部において、タイラーの「アニミズム」、マックス・ミュラーの「ナチュリズム」、ラングの「最高存在」を批判的に検討しているため、デュルケーム宗教理論に至る道として、この選択は妥当だと思われる。W・ロバートソン・スミス、J・G・フレイザー、R・R・マレット、H・ユベール、M・モース、R・エルツ、R・ペッタッツォーニが関連する研究者名となる。年代でいうと、マックス・ミュラーが「宗教学(Science of Religion)」の語を用い始めた1850年代から、デュルケームと(その弟子にあたる)モース、エルツらの宗教学関係の著作が揃う1910年代が研究対象となる。「アニミズム」、「ナチュリズム」、「最高存在」、「トーテミズム」、「mana」といった基本概念を軸に、宗教理論におけるイギ

リス(マックス・ミュラー、タイラー、ラング、ロバートソン・スミス、フレイザー、マレット)、フランス(デュルケーム、モース、ユベール、エルツ)、イタリア(ペッタッツォーニ)の相互関係を探る。そして、こうした宗教理論の成立を同時代のイギリスを中心としたスピリチュアリズムとの関係という観点から、宗教学史的かつ宗教史的に位置づける。

「総合的研究」と銘打っているのには、大きく二つの理由が存在する。一点目は、一つの地域の一つの学派の研究にとどまらず、19世紀イギリス、フランス『社会学年報』派、イタリア宗教史学派の繋がりを探る研究であるということ。関連する原典すべてを逐一検討し、それらの繋がりを考察することは、共同研究によってのみ可能となる。二点目は、学説の再検討、各理論の学問的連関の分析にとどまらず、「宗教研究と宗教」特に「宗教研究とスピリチュアリズム」の関係について考察する点である。宗教学黎明期に提出された理論が、同時代の宗教的諸潮流、とりわけスピリチュアリズムとどのように関わっていたかは、学問的な宗教研究の成立を考えようとする際、避けては通れない重要な問題であると思われる。マックス・ミュラーは従来、同時代のスピリチュアリズムに無関心であると捉えられてきたが、彼の仕事を、同時代のスピリチュアリズムに触発された「新しい宗教性」の模索と捉えることも可能である。一方、タイラーの「アニミズム」概念の検討には、彼自身の出自であるフレンド派の「インナーライト」の考察が不可欠である。また、ラングは心霊現象研究協会(SPR: Society for Psychical Research)の創設に関わっており、その宗教研究は心霊研究と一体であったと言える。加えて、W・ヴント、W・ジェームズ、H・ベルクソン(ジェームズとベルクソンはSPRの重要人物であるし、ヴントはスピリチュアリズム批判の論陣を張っている)さらには、スピリチュアリズムの対抗概念としてのアニミズム理解を展開したA・アクサコフと、彼を論駁しようとしたE・フォン・ハルトマンを含めて考察することにより、当時の学問的・宗教的文脈におけるスピリチュアリズムの概念史の構築のみならず、アニミズム概念の再検討にも繋がり、イギリスを中心としたヨーロッパ規模の学問史的かつ宗教史的な文脈の解明が可能となる。

4. 研究成果

2016年度は、5月の第一回研究会を受けて、11月に、研究分担者である山崎が翻訳したデュルケーム『宗教生活の基本形態』の合評会を開いて、デュルケーム宗教学思想とタイラー、ラング、フレイザーの学問との比較を行い、フランス『社会学年報』学派の宗教研究についての理解を深めた。また、江川と研究分担者である久保田が編集と執筆、山崎が執筆を担当し、『呪術』の呪縛【下】(リトン)を刊行した。黎明期の宗教研究を「呪術」という観点から再考し、「宗教」のネガとしての「呪術」概念を明るみに出した点が成果としてあげられる。

2017年度は、5月に研究会を開催し、宗教学生成期の代表例としてデュルケームの宗教論を対象とし、デュルケーム『宗教生活の基本形態』(1912年)と、19世紀イギリスの人類学的宗教研究(ミュラー、タイラー、ラング、フレイザー、ロバートソン・スミス)との接続/非接続を再考する必要性を確認した。なぜなら、デュルケームは同書において、ヴィクトリア期の宗教研究を順に取り上げ、それらを発展的に批判することで、自らの宗教論を展開させているためである。この認識を受けて、ヴィクトリア期の人類学的宗教研究の翻訳アンソロジーの出版企画(二巻本)を通過させ、刊行のための準備を開始した。また9月には、日本宗教学会において、エミール・デュルケームを、『社会学年報』学派、イタリア宗教史学、アメリカ哲学から照射するパネル発表「デュルケーム宗教学思想の可能性 没後100年によせて」(山崎亮「宗教学者」デュルケームの生成)、江川純一「イタリア宗教史学派はデュルケームをいかに読んだか?」、堀雅彦「デュルケームとアメリカ哲学 その距離と接点」、コメンテーター:竹沢尚一郎)を行った。同パネルでは、宗教論をめぐる『社会学年報』学派内の影響関係、『社会学年報』学派とイタリア宗教史学派の相似と差異、プラグマティズムとデュルケーム宗教論との関わりを明らかにした。

最終年度である2018年度は、まず5月に、公開研究会「宗教学黎明期の再検討」を北海道大学にて開催した。発表内容は、小柳敦史「世紀転換期の「学問の無前提性」論争における神学と宗教学」、久保田浩「神学からの宗教学の独立」という神話 『宣教学・宗教学誌』(1886-1939)に見る宗教学黎明期の状況、江川純一「宗教史学の創始者ヴィーコ ペッタッツォーニ宗教史学の言説空間」である。当研究会によって、「神学」と「宗教学」とのあいだの線引きは時代・地域により差異がみられ、カトリック文化圏のほうが明確であること、また、「神学」と「宗教学」をめぐる言説は、「規範的宗教学」/「記述的宗教学」の線引き(または重なり)の問題と直結することを再認識することができた。また、12月には、本研究課題の締めくくりとして、公開研究会「宗教学生成期における哲学の位置」を東京大学にて開催した。発表内容は、久保田浩「0・プフライダーにおける「宗教史学」と「宗教哲学」との関係を探って」、堀雅彦「W.ジェームズにおける「未分類の残余」への視点と「宗教」概念の再構成」、山崎亮「社会学年報学派における認識論の構図」、江川純一「ヴィーコとペッタッツォーニ 歴史・宗教・哲学」、下田和宣「コメント」である。各発表によって、プフライダー、ジェームズ、デュルケーム、ペッタッツォーニは、哲学から大きな影響を受けつつも、哲学との差異化を目指したことが明らかになった。代表者は本研究費による資料調査に基づき、研究代表者は、『ニクス』第5号第一特集「聖なるもの」(堀之内出版)の共同主幹を担当し、論文「ペッタッツォーニの「サクロロジア」」、『ニクス』第5号、同じく論文「イタリアの新たな「世俗性」」、池澤優編、『政治化する宗教・宗教化する政治いま宗教に向き合う・4』(岩波書店)を発表し

た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- 江川純一、ペッタッツォーニの「サクロロジア」、ニクス、査読無、5号、2018、66-77
山崎亮、「宗教学者」デュルケームの生成 社会学年報学派の宗教学思想・中間考察、島根大学人間科学部紀要、査読無、1巻、2018、1-17
江川純一、「magia」とは何か デ・マルティノーと、呪術の認識論、呪術の呪縛、査読無、下、2017、65-80
山崎亮、社会学年報学派の呪術論素描、呪術の呪縛、査読無、下、2017、37-63
久保田浩、宗教学史叙述とは何か <ティーレ宗教学>の宗教史的文脈を手掛かりに、宗教学年報、査読無、34、2017、25-43
堀雅彦、内村鑑三とW.ジェームズ 比較による再読の試み、基督教学、査読無、51、2016、27-43

〔学会発表〕(計 16 件)

- 江川純一、ヴィーコとペッタッツォーニ 歴史・宗教・哲学、研究会「宗教学の生成期における哲学の位置」、2018
江川純一、ペッタッツォーニ宗教史学とヴィーコの学、日本宗教学会、2018
江川純一、宗教史学の創始者ヴィーコ ペッタッツォーニ宗教史学の言説空間、研究会「宗教学黎明期の再検討」、2018
山崎亮、社会学年報学派における認識論の構図、研究会「宗教学の生成期における哲学の位置」、2018
久保田浩、1920・30年代の「オーディン」表象と「アトランティス・北方的」ユートピア宗教とナショナル・アイデンティティとの関係を巡って、第2回国際ワークショップ「諸国民文化 国際的文脈における日独の視点」(国際学会)、2019
久保田浩、0・プフライダーにおける「宗教学」と「宗教哲学」との関係を巡って、研究会「宗教学の生成期における哲学の位置」、2018
久保田浩、「神学からの宗教学の独立」という神話 『宗教学・宣教学誌』(1886-1939)に見る宗教学黎明期の状況、研究会「宗教学黎明期の再検討」、2018
江川純一、「新しい学」としてのイタリア宗教史学、研究会「20世紀イタリアの芸術と文化」、研究会、2018
江川純一、ファシズム期イタリアにおける宗教史学・人類学・民俗学、研究会「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係 20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」、2017
江川純一、イタリア宗教史学派はデュルケームをいかに読んだか?、日本宗教学会、2017
江川純一、イタリア宗教史学を作ったもの ヴィーコ・近代主義・日本宗教、「宗教の近代」研究会、2017
山崎亮、「宗教学者」デュルケームの生成、日本宗教学会、2017
久保田浩、「宗教学と神学」を改めて考える、日本宗教学会、2017
久保田浩、ドイツ民族主義宗教運動における「ナザレのイエス」表象の諸相、日本宗教学会、2017
江川純一、宗教史学における差異と反復 ペッタッツォーニとエリアーデ、日本宗教学会、2016
久保田浩、「宗教史」の中の「宗教学」 オランダ宗教学創成期を中心に、日本宗教学会、2016

〔図書〕(計 5 件)

- 江川純一ほか、岩波書店、池澤優責任編集『政治化する宗教宗教化する政治世界編II(いま宗教に向き合う4)』、2018、262(「イタリアの新たな「世俗性」」117-132を寄稿)
江川純一ほか、堀之内出版、ニクス、2018、338(第一特集「聖なるもの」佐々木雄大との共同主幹1-195)
久保田浩ほか、岩波書店、藤原聖子責任編集『世俗化後のグローバル宗教事情世界編I(いま宗教に向き合う3)』、2018、288(「ゲルマン的ネオ・ペイガン」は何に対抗しているのかドイツの「ゲルマン的ノイ・ハイデントウム」から考える」164-179を寄稿)
Hiroshi Kubota, Schreiben Siedieerste Bewertung, Religion, Politik und Ideologie. Beitrage zueinerkritischen Kulturwissenschaft, 2018, 405 (Der "moderne" Spiritismus Europasunddie "Moderne" Japans: Einwissenschaftsgeschichtliche Betrachtung 71-86を寄稿)
江川純一、久保田浩ほか、リトン、「呪術」の呪縛【下】、2017、414

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：山崎 亮
ローマ字氏名：(YAMAZAKI, Makoto)
所属研究機関名：島根大学
部局名：人間科学系
職名：教授
研究者番号(8桁)：40191275

研究分担者氏名：久保田 浩
ローマ字氏名：(KUBOTA, Hiroshi)
所属研究機関名：明治学院大学
部局名：国際学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：60434205

(2)研究協力者
研究協力者氏名：堀 雅彦
ローマ字氏名：(HORI, Masahiko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。